『世本』佚文の史料學的研究
―漢唐經學における『世本』の認識・受容を中心に―
要約

李弘喆

『世本』は中國先秦史研究においては不可缺ともいえる重要な材料の一つである。『世本』原書はつとに散佚し、十八世紀以降の清朝考證學者が傳世文獻に引用された『世本』の佚文を丹念に集め、可能な限り復元を試みた。その作業を輯佚といい、現在利用されている『世本』は清代の輯佚本である。『世本』の成書年代及び作者に対する傳統的な關心はそのまま現代中國の研究者に繼承されている。從來の『世本』研究が成書年代ないし作者に關心を限定し、『世本』の文獻的性格に言及しても十分な說得力をもたなかったのは、「輯本」というものの性格を十分に意識した上での包括的研究が志向されなかったからである。

『世本』の内容が主に系譜であるという認識は長期にわたって、先秦研究者の間に共有されてきた。從来の『世本』研究は主にこのような認識を前提として、先秦史の分野で行われてきた。後漢以降の書物にみえる佚文を『世本』原文の斷片とみなし、佚文の記述形態を『世本』原文の固有の「形式」として、『史記』などの文獻と比較することに特に關心が寄せられてきた。近年、データベースの進展によって、新しい佚文が次々と發見され、清朝考證學者が殘した輯本を補充することも可能になった。記述形式を想定した上での再輯佚及び佚文形態研究は『世本』のみならず、輯本研究全体に大きな影響を与えた。

しかし、このような『世本』佚文研究方法は引用に伴う原文の攪亂といった事態をほとんど考慮していない。それは、『世本』がいかなる書物として引用されてきたかといった『世本』受容の具体的推移が等閑に付されていたからである。『世本』は傳世していた數百年の間に様々な性格の異なる文獻に引用された。そして『世本』の「使用痕」として殘された佚文のほとんどは訓詁の材料として後漢以降の注疏文に保存されたものであり、『世本』の原文そのものではなく、あくまで訓詁學の注疏文の一部である。故に『世本』佚文のあり方はその引用先の情報提示の形式に制約されている。果たして『世本』は複數の引用先において、いかに使用されているのか、この問題を檢討しない限り、佚文の記述形態に關聯する議論は成立しえない。つまるところ、有效な『世本』

佚文の史料學的檢討は訓詁學系統内における『世本』の受容狀況の變遷をたどることにほかならない。

從來の『世本』研究は主にこのような認識を前提として、先秦史の分野で行われてきた。それは、後漢以降の書物に引用された佚文を蒐輯することで原文の復元を試み、最終的に資料として先秦史研究に用いることが目的であった。先秦史研究においては、『世本』は缺かせないものであるにもかかわらず、「現行の『世本』はいかなる原資料に依據しているのか」という根本的な問題はいまだ檢討すらされていない。本稿はその問題に答えるための作業である。

今日までのほとんどの先行研究は『世本』輯本が蒐集した佚文を『世本』原文の斷片とみなして分析してきたが、實のところ、これら佚文はとりわけ注釋などの傳世文獻に引用されたものである。つまり、輯本が散佚した文獻の「使用痕」に過ぎず、「使用痕」のみに賴って原物の復元は到底出來ないが、引用元に立ち戻れば、原書への認識及び佚文の實態を解明することは可能である。このことを手がかりにまずは、『世本』が散佚するまでいかに讀まれたか、書物としていかに認識されていたかを檢討して、『世本』輯本の史料學的性格を明らかにする。最も優れた茆泮林輯本を起點として、『世本』を引用した文獻に立ち戻る。つまり、輯本を編纂する過程とは逆方向の作業を試みる。「『世本』の文章がどこにあるのか」ではなく、「『世本』の文章がなぜそこにあるのか」を念頭に置き、考察を進めていく。

本論文は、本稿は『世本』の文獻として役割を後漢時代から初唐に至るまでの學術史に位置付け、『世本』の受容實態を解明すると同時に、現存の輯本の史料學的性格を明らかにするものである。 前漢末期より魏晉時代に至るまでの文獻に確認される『世本』の絕對的用例數が少ないので、第一・二・三章では、『世本』佚文の分析とその受容背景である經學の發展を併せて檢討し、複數の角度から『世本』に對する認識を檢討し、それにより『世本』の文獻學的性格を考察した。南北朝時代以降の經學が五經正義に集約され、『世本』佚文は五經正義に集中し、引用には一定の規則性が見られる。そのため、第四・五・六章では、經學の傳承を重視し、舊注疏がもたらした影響を意識した上で、「易・詩・書」・「三禮」・「三傳」を併せて、「九經」疏に確認される『世本』佚文の疏文における役割を確認し、考察の焦點を佚文のあり方に當てた。

まずは序論では、これまでの『世本』研究を概觀しつつ、『世本』研究の問題意識が長期にわたって輯佚以前の引用形態の考察に至らず、輯本を原書の斷片とみなされてき

たこと、また先秦史研究の中でなされてきた原文の復元の試みは引用に伴う原文の攪亂といった事態はほとんど考慮されておらず、『世本』受容の具體的推移が等閑に付されていたことを指摘した。そして、輯佚研究は引用行爲自體を研究對象として、原書の受容實態を解明すべきことを示した上で、原書の受容實態を解明することと佚文のあり方の檢討とは表裏の關係であると新たな方法論を提示した。

第一章「『世本』受容前史」では、『世本』が前漢末期より後漢時代前半期に至るまでの漢代學術及び世系關係資料の實態を分析することを通じ、『世本』が本格的に文獻に引用されるまでの學術史的背景を解明した。文獻としての『世本』テキストは前漢末期に劉向によって定著したが、後漢初期に至るまではごく一部の「博學」を好む人にしか知られていなかったと示した。また、後漢初期において、訓詁學のかたちはいまだに整っておらず、當然『世本』を注釋・訓詁の材料として使用することはなかったと論じた。そして、王符の『潛夫論』志氏姓には『世本』世系記載と同源の原資料が存在し、宋忠注が成立する前の『世本』世系記載の原貌がある程度反映されていることを指摘し、『世本』世系佚文の形態に對する全面的な分析の必要性を提示した。

第二章「後漢訓詁學における『世本』の受容」では、後漢時代の應劭・鄭玄・高誘が著した多樣な注釋に用いられている『世本』佚文を蒐集し、その傾向性を考察した。後漢時代における『世本』の引用は上古に集中しており、殷周及び春秋時代に關わる引用はみえず、世系や氏姓などの引用もまったく確認されない。訓詁學に用いられる『世本』佚文はほとんど上古の聖人・聖王制作の記述に集中し、後漢時代における讖緯思想の動きが看取されると指摘した。また『漢書』應劭注に用いられることによって、『世本』の「史注」材料としての位置付けが成立し、その引用の擴大は「漢書學」の發展に關聯すると論じた。

第三章「『世本』宋忠注をめぐって」では、まず『世本』宋忠注とされる記述の整理作業を行い、「宋忠」、「宋衷」、「宋仲子」など輯本にみえる複數の呼稱の性格・成因を明らかにした。漢魏の交に成立した『世本』宋忠注と思われる宋忠の言說を分析し、宋忠の學問の特徵に基づき、『世本』の文獻的性格を再考し、『世本』宋忠注成立の學術史における意義を解明した。後漢末期に宋忠が曆關係の書物を集め、春秋の曆を檢討するしたことは『世本』宋忠注が成立するきっかけであったと示し、宋忠が後漢末期の易學・左傳學に基づき『世本』を說明しており、宋忠注の成立によって『世本』と左傳學との關係が强化されたと指摘した。後に杜預が宋忠の學問の影響を受け、それをきっかけに

『世本』がはじめて春秋學の注釋材料として扱われるようになったと論じた。

第四章「『世本』世系佚文をめぐる考察―『詩』·『書』·『易』正義篇―」では、『周易正義』・『毛詩正義』・『尚書正義』に用いられる『世本』世系記載の疏文としての役割・あり方を逐一確認した。『周易正義』が『世本』を引用しない原因は、王弼注の『世本』への態度を踏襲したことにあると指摘した。『毛詩正義』にみえる『世本』世系記載の引用・言及例を分析した上で、『世本』の世系記載の不規則性を指摘し、疏文は説明の便宜上、必要な世系情報を集約した上で提示していることを明らかにした。さらに、『尚書正義』に利用される『世本』の上古關係の世系情報は主に或説として否定される傾向が見える。その主な原因は『尚書正義』がその依據した僞孔傳の立場を繼承したことにあると考えられ、筆者が指摘した『世本』と緯書との間に存在する共通點を裏附けると論じた。その上で、『尚書正義』・『毛詩正義』に散見される、『世本』世系佚文の「A生B」の記述形式は疏文が聯續的な世系情報を提示するための形式に過ぎないことを確認した。

第五章「「三禮疏」における『世本』の受容」では、禮學の學術史的背景を意識した上で、『周禮注疏』・『儀禮注疏』・『禮記正義』における『世本』の受容狀況を檢討した。賈公彥の「二禮疏」は鄭玄注に嚴密に對應し、その扱い方を踏襲した。一方、『禮記正義』は編纂の段階において、複數の編纂者によって禮學以外の要素も配慮され、『禮記』鄭玄注の春秋時代の世系説明の證據として、『世本』の詳しい世系情報を提示していると指摘した。また、『尚書正義』・『毛詩正義』と同様に、『禮記正義』にみえる「A生B」の書法は『世本』世系記載の固有の形式であったとする根據はなく、聯續的な世系情報を節畧した上で提示する最も常用的な形式であることを確認した上で、「A動詞B」の書法は情報提示の最も簡潔な表現であり、世系記載に限らず、「A作B」・「A居B」を『世本』「作篇」・「居篇」固有の記述形式と斷言することはできないと佚文の「記述形態」の本質を明らかにした。

第六章「春秋學における『世本』の受容」では、春秋學の學術史的背景を意識した上で、「三傳」注・疏における『世本』受容を考察した。公羊學の議論の方向性をはじめ、後漢時代後期に成立した何休の『春秋公羊解詁』の傾向に鑒みれば、そもそも『世本』のような書物を必要としないことを指摘した。范寧の『穀梁傳集解』が既に『左傳』を參照し、『穀梁疏』はその立場を繼承しており、主に傳・注が附されていない經文に言及される人物を特定するために、『世本』の説を否定することがなく、認めた上でその

記述を取り上げている傾向を明らかにした。宋忠からの影響が杜預・韋昭が『世本』を利用するきっかけであり、杜預・韋昭は後漢時代の學者と違って、『世本』「作」に對する關心を持っていなかった。それは「劉氏受命」が根幹となった讖緯思想の退潮によるものと指摘した。『左傳正義』は頻繁に『世本』の世系情報を用いるが、杜預注と一致しなければ、信用するに足らずと否定される。『左傳正義』にみえる「A 生 B」の書法の世系記載は他の四正義のと同様に、疏文が『世本』の世系情報をまとめなおしたものである。第四・五章の考察結果を踏まえて、「A 生 B」の形式の世系記載は『世本』固有の記述形式ではなく、五經正義が編纂される際に、世系情報を提示する常用的な書法であることは明らかとなった。

本課題の考察對象とされる『世本』佚文は、前漢末期より唐代初期に至るまでの經學を中心とする複數の書物の『世本』に對する認識であるので、同じ書物の斷片ではなく、それぞれ個性を持つものである。本稿は各引用元が『世本』に對する認識を檢討した上で、佚文の個性を逐一に考察するものであり、卽ち『世本』佚文を對象とする史料學的基礎研究である。そのため、各引用元における現象を出來るだけ客觀的に示しておくことが必要とされ、通常の文獻學研究のように包括的結論をまとめることはできない。この一聯の考察によって、これまで『世本』輯本に對する認識は根本的に見直され、問題意識の硬直化は改善されたと言えよう。また、嚴密な記述形式を想定した上でなされて來た佚文形態研究をはじめ、佚文の記述形式に依據する再輯佚の限界が證明され、再檢討を餘儀なくされよう。佚文の形態がいかに引用元の都合によって變化するのかは自明となり、『世本』のみならず、輯本研究が輯佚作業以前の佚文の形態を對象にする必要性を明らかにした。

上述のように、本稿で獲得した知見は『世本』研究のみならず、輯本研究全體にも大きな意義を持つ。これまでの輯本に對する史料學的考察は專ら輯佚の段階に焦點をあて、輯佚の再確認や再輯佚が中心として行われた。そのために輯本に對する認識は清代の輯佚活動と同じ次元に留まっていると言わざるを得ない。輯佚によって集められたのは、原書の斷片ではなく、原書に對する「認識」である。各時代の多樣な認識は輯本に收められることによって、同じ平面上に投影され、それぞれが持つ傾向が捨象されてしまった。輯本をもとにして、原書を「復元」することはできないが、引用元に立ち戻れば、原書への認識及び佚文の實態を解明することは可能である。さらに言えば、原書の受容實態を解明することと輯本の史料學的考察とは表裏の關係である。

輯佚によって、散佚文獻の部分的な情報が輯本に收錄されたのであり、その史料價値は決して否定されるべきものではない。しかしながら、佚文はいかなる意識の下で選擇され、殘されたのか。その上で、佚文のあり方は引用元での役割によって、いかに變化しているのか。それを明らかにすることは輯本を利用する際になくてはならない手續きであろう。 本稿が示している方法論は『世本』のみならず、『竹書紀年』を代表とする輯本資料を扱う際にも使える、汎用性を持つ有效な手法である。『世本』の研究を通じて、輯佚研究の新たな方向を示しておきたい。